

リコーダーによる表現の工夫に焦点を当てた小学校音楽科の器楽指導

A Study of Teaching Instrumental Music focusing on Devices of Expression of the Recorder in Elementary School Music Education

山 中 和佳子

Wakako YAMANAKA

(音楽教育講座)

(平成29年10月2日受理)

要 約

本研究は、表現の工夫に着目したリコーダー学習において児童の表現能力を高めることができる指導の在り方を提案し、音色に着目した学習の音楽教育的意味を指摘することを目的とした。その結果、技能習得において教師が身体的気づきを促す助言を行うことが重要であること、新しい音楽的な気づきや学習課題を生み出すために比較聴取活動が有効であることを指摘した。同時に、音楽教育的意味として耳をよく澄ませて「聴く」能力の育成、言葉だけでは伝えられない音の微妙な質の違いを聴き取り、思いをもって丁寧に表現しようとする意欲や態度の育成、そしてそれらの表現に伴う身体的能力の育成、多様な事象や感情を内包している音楽を自ら読み解く能力の育成、ということを目指した。

キーワード：器楽指導、リコーダー、表現の工夫、音色、技能

1. はじめに

本研究は、小学校音楽科教育のリコーダーによる表現の工夫に着目した学習において、児童の表現能力を高めることができる器楽指導の在り方を提案し、音色に着目した学習の音楽教育的意味を指摘することを目的としている。

平成29年3月には、平成32年度から完全実施される新学習指導要領が告示され、音楽科における器楽活動の学習内容として、5、6年生の表現に関しては以下のように示された。

- ア 器楽表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもつこと。
- イ 次の(ア)及び(イ)について気付くこと。
 - (ア) 曲想と音楽の構造との関わり
 - (イ) 多様な楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わり
- ウ 思いや意図に合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。
 - (ア) 範奏を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして演奏する技能
 - (イ) 音色や響きに気を付けて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能
 - (ウ) 各声部の楽器の音や全体の響き、伴奏を聴い

て、音を合わせて演奏する技能

これらからわかるように、現行の学習指導要領よりも、さらに明確に各活動に求められる技能について表記されるようになっている。また、新学習指導要領に対応した解説には、それぞれの楽器の学習の中で、楽器固有の音色について、演奏の仕方や楽器の組合せなどを工夫することにより、その音色や響きの変化に気づく学習をすることが示されている。そして、技能の部分では、このイ(イ)に示す「楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わりについて気付くこと」との関連を図ること、それによって、楽器のもつ固有の音色やその響きの特性を生かした楽器の演奏の仕方を身に付けるようにすることが重要であることが述べられている。新学習指導要領では、これらの技能が表したい音楽表現、すなわち思いや意図に合った表現をするために必要となるものとして、明確に位置付けられているのである。それでは、「音色や響きに気を付けて」演奏できる技能を伸ばすには、どのような指導が必要となるのだろうか。

本研究では、リコーダーの音色に関する授業実践を行い、その中で特に言語活動における児童の発言に着目し、児童が知覚感受している音楽的な諸要素と自分なりに演奏を工夫した点や気づきについて、それらをどのように言語で表現しているのかを見取る。さらに、それらを自分たちの音楽表現へとどのように還元

させようとしているのかについて検討する。また、これらに加えて本授業を行った教師へのインタビューから音色に着目した学習の音楽教育的意味について検討する。

2. 授業実践の概要

- ・授業実践校：福岡教育大学附属小倉小学校の5年生2クラス
- ・実践者：福岡教育大学附属小倉小学校 藤野剛教諭
- ・実践日時：2017年6月（4時間×2クラス）
- ・学習教材：リコーダー2重奏曲《ちいさな約束》
- ・学習計画：4時間構成

筆者は、事前に藤野教諭に既習の内容について確認し、授業展開について打ち合わせを行った。筆者が関わった内容は、4時間計画のうち、後半の2時間である。なお、同じ学習計画を1組、2組それぞれに行った。最初の2時間は、2パートの旋律が演奏できるようになるという学習目標のもと、主に運指の確認と苦手な部分を取り出して練習する、という学習を行った。この2時間では音色に関する学習や言葉がけはほぼ行っていない。その後の第3、4時に音色の学習に焦点を当て、授業を展開した。本稿では、主に3時間目の活動を中心に述べていく。

3時のめあての学習の概要は以下のとおりである。

3時のめあて：曲の感じに合う音色になるようにふき方を工夫して演奏しよう

- ①前時の復習を兼ねて主に第1パートを演奏する。その後、範奏を聴き、学習曲のイメージをクラスで共有する。
- ②自分たちの演奏と範奏CDとを比較聴取し、相違点を発表する。自分たちの目指す音色を考える。
- ③「どうすればそうなるのかな、どういう風に音を鳴らすとそういう音になるかな、探ってみよう」という課題意識を持たせた発問を行った後、個人で練習する。
- ④グループになって、自分たちの気づきや工夫を共有し、試しに演奏してみて、より自分たちの思う音色に合うような表現方法を探る。
- ⑤グループでの工夫や気づきをクラス全体にむけて発表する。
- ⑥発表し共有したことを意識しながら、最後に演奏する。
- ⑦最後の演奏を録音して、実際に表現できているか客観的に鑑賞する。

本実践で行った学習展開は、大きな流れとしては各組とも共通であるが、導入の活動内容については各組で2点変化を付けて行った。そこで、①②の導入部分を含む学習内容については、各組に分けて示す。

3. 実践授業の実際

3-1. 1組の「比較聴取から演奏の工夫を考える活動(①②の活動)」

1組では、授業の初めに常時活動としての発声をしたのち、教師からの演奏時の注意点などは言葉がけせずに、前時の復習を兼ねて学習曲を全員で3回演奏した。そのあと、範奏を聴き「どんな感じの曲か」といった自分なりの曲のイメージを全体で発表し合った。以下は、その際の児童の言葉である。

- ・なんとなく暗い。
- ・1のパートが伸ばすところが伸ばしている感じ、響いている感じがした。
- ・全体的に音が柔らかいから優しい感じがした。
- ・悲しそうな感じ。
- ・2分音符がいっぱいあるので、なめらかな感じがした。
- ・大きな約束だとすごい盛り上がりすぎて楽しい曲、小さいのはそんなに明るくなくて・・・だから暗い曲。
- ・小さな約束ってみんなに向かっておーいっていうことじゃないから、ねえねえって感じだから、寂しそう。
- ・ささやいてる感じ。

この曲は短調であるため、「悲しい」という意見が多く出されたが、他方、「悲しい」「暗い」感じかもしれないけど、小さな約束がなぜ悲しい感じなんだろう？という疑問もつぶやかれていた。交流の後半では、「おーい」「ねえねえ」「ささやいている」といったように、約束するときの相手との距離に着目した意見が出されるようになった。

曲のイメージを共有したのちに、「吹けているか吹けていないかではなくて、音に注目して聴いてみてください」という言葉がけのもと、再度範奏CDの演奏を流し、自分の演奏と比較聴取させた。範奏が終わったとたん、「全然ちがーう」といったつぶやきがあちこちから聞かれた。これらの比較聴取によって、児童たちは以下のような自分たちの演奏の改善点を指摘した。

- ・音がばらばらで最初のミが強いので改善したほうがいい。
- ・自分たちの演奏は、3段目と4段目の低いミから高いミに行くところが強くなっている。
- ・伸ばすところをなめらかに伸ばしたらいい。
- ・低いミとファがあっていない、高い音を吹いている人と低い音を吹いている人がいる。
- ・全体で吹いているとみんなタイミングがちがって、ばらついた感じがする。
- ・CDは柔らかいとかなめらかって感じ取れるけど、自分たちは全体的におんなじ強さで、柔らかやなめ

らかになっていない。

- ・自分たちは全体的に音が雑でばらばら。
- ・CDでは音が高くなるにつれて、ちょっとだけ音の強弱をしているので、それに気をつけて少しだけ音の強弱をするといい。

自分たちの演奏への批評を行った後、どうしたらそういう演奏ができるようになるか、自分で演奏しながら探ろう、という課題を投げかけた。あわせて、考えるポイントとして「どういうふうに息を出すかを考えたり、気を付けたりすればCDのような柔らかな演奏になるのか」身体の使い方に意識を向けさせる言葉がけを行い、個人練習に移った。

3-2. 2組の「比較聴取から演奏の工夫を考える活動(①②の活動)」

2組では、学習の導入部分に着目し、常時活動として最初に発声を行った後、既習曲《いろんな木の実》を歌った。児童はリズムに合わせて身体を少し上下や左右に振りながら、軽快で明瞭な声で歌っており、楽しんで歌っている様子がうかがえた。この活動の後教師が「いい声を出すにはどうすればよかったか」と発問し、歌い方や発声の方法を復習する時間を取った。その際には、児童に自由に発言させながら教師が「足を肩幅に広げること、おなかから声を出すような感じ、声を上に飛ばすような感じ、笑顔、弾むような感じだからそれに合わせて体を動かしていた、体をリズムに合わせたほうが歌いやすい、しっかり息を吸うのが見た目にわかる感じだった」というように発言をまとめ、歌唱の際の具体的な身体の使い方を確認させた。

これを踏まえて、「リコーダーを演奏するときはどうだろう?」という投げかけのもと、自分の演奏時の様子を振り返らせた。教師が、児童の演奏時の姿を模倣しながら「ずっと止まっているよね、身体を使って表現しているかな? お地蔵さんみたいになってるよ、じーっと下を見ている」と発言すると、児童からは「こわー・・・」といったつぶやきが聞こえた。その後、本時のめあてとして「こういう感じで演奏したいなという思いを表現したり、きれいな音で演奏したりできるようになるように、自分たちで探す時間を取ります」と説明し、CDに合わせて、1回上下パートを演奏した。この演奏時には、児童たちが2拍や4拍ずつのまとまりに合わせて左右に少し揺れながら演奏したり、2小節、あるいは4小節単位のフレーズの入り部分で少し頭を上下させながら演奏したりしている姿が見られた。

演奏の後、CDの範奏を流し自分たちの演奏とどのような相違点があるか比較聴取させた。以下に、児童たちが比較聴取後に発言した内容を示す。

- ・伸ばすところを、CDは長く伸ばしている。

- ・全体的に私たちは強く吹いてるけど、CDは音量が小さめで優しい感じ。
- ・僕たちは(音が)短いから弾んでて明るい感じ、この曲は悲しい曲でもあるし……。夜みたいなイメージ。
- ・僕たちは息をきちんとやっていない。
- ・ブレスをしっかりとしないと、(フレーズを)繋いでいけない。ブレスが多すぎる。
- ・低いミと高いミに気を付ける。
- ・伸ばすだけじゃなくて、切り方にもふんわりした感じとか優しい感じがある。
- ・入りが柔らかかった感じがする。
- ・入りがすんなり入っている。ぷーって吹くんじゃなくて、自然な感じでさーって入っている。

この後、「リコーダーの演奏の時に『ふんわり』や『柔らかな』や『優しい』を表現するためには、どうしたらよいか」という言葉がけとともに、「歌の時にもいろいろポイントがありましたよね、体を使ってますよね」というように、再度演奏の際の身体の使い方を意識させる言葉がけを行った。そして、「イメージした音を演奏するにはどんなふうにしたらいかな」という課題意識を持たせて個人練習に移った。

3-3. 比較聴取における児童の音楽的気づき

これらの児童の発言から、1組と2組の各活動における児童の音楽的な気づきに着目したい。1組と2組のここまでの学習展開の主な違いは、2点ある。1点目は、言語活動を行った時間数である。1組の場合は、曲のイメージを共有する時間を取ったあと、比較聴取を行い、自分たちの演奏の改善点を発表しており、2回全体での言語活動の時間を取っている。2組では、曲のイメージとともに比較聴取した際の気づきを発表しており、言語活動の時間は短くなっている。2点目は、最初に音をコントロールする方法を考える視点を教師が提示したことである。

1組では、《小さな約束》という題名と短調であるという特徴から、曲のイメージを考えていた。自分たちがどのようなところを改善すればよいかという言語活動を見ると、1組では、1つ1つの音や、全員で演奏した時の音の強さに着目していることがわかる。

2組では、1組のように曲のイメージに焦点を当てて言葉で発表する活動は行っていない。しかし、言語活動の中で、曲のイメージを交えながら発表する姿が見られた。また、2組の発言では、個々の音の間違いや扱いについては、1組ほど指摘されなかった。他方、フレーズの入り方や切り方のイメージや、フレーズをなめらかに表現するための身体の使い方=ブレスの仕方について気づいている様子が見られた。2組のほうが1組よりも言語活動にかけた時間は短かったが、楽曲を全体的になめらかにするには、具体的にどのよう

にすればよいのかということを考える視点を、この時点である程度共有できたことがわかる。2組の学習では、最初に歌いながら身体を動かすことで、リズムや曲の持つ雰囲気を感じ取っていたこと、また教師が「いい声」を出すにはどのようにすればいいかという復習を行ったことが、リコーダーで表現する際の身体操作の気づきを促進したと推測される。

3-4. どういう風に音を鳴らすと自分が表現したい演奏ができるか探る活動 (③～⑤の活動)

③の個人練習では、各組とも4分ほど時間を取って行った。その後、気づいた点や工夫した点をグループで伝え合う交流活動④に入った。ここでは、④のグループ活動の内容と⑤のクラス全体での言語活動について述べる。

1) 1組でのグループでの交流活動④に見られた演奏方法の気づきと工夫

A 児は、自分のグループの3名に一点二音からサミングが必要になる二点ホ音の移り変わりに気を付けて演奏したいという気持ちを伝えていた。その後、吹き方について「ナチュラルにつなげたい」と発言し、試しに自分で演奏して聴かせた。同時に、「ナチュラル」に音をつなげるにはタンギングを工夫する必要があることを伝え、「テュー（はっきりした発音で）じゃなくて、トゥーって感じで」と自分が思うタンギングの強さを数回説明していた。さらに、タンギングの擬音語を言いながら、あわせて手を用いて、水平方向に投げつけるような直線的な息の流れと、下に少し沈んで浮き上がるような柔らかい息の流れを表現し、強さと息の方向性を伝えようとする姿が見られた。

次に、この部分をB児が演奏し、今度はサミングする際の親指の使い方に着目し、B児の左親指を下からじっとのぞき込みながら、どれくらいすき間を開ければ良いか確認し合っていた。演奏後には、指ですき間の幅を指し示し、「髪の毛一本だね」と確認し合う姿が見られた。

2) グループで共有した工夫や良いところをクラスで発表する活動⑤

グループ活動の後に、グループの中で良いと思った工夫や気づきをクラス全体で共有する言語活動に移った。その際に、児童は以下のような内容を発言した。

- ・Dさんは、なめらかで切れてなくていいと思った。指の位置を覚えていたのでなめらかに進んでいた。
- ・高い音が大きかったりすると「ビーン」と聴こえるけど、Eさんはふんわりしてて、優しい感じの息の使い方できれいな高い音が出ていた。
- ・Fさんは、最初のミの音が、大きく息をすってやさしく吹いていたから、柔らかかったのが良いと

思った。

- ・Gさんは、最初のミのところが優しくなっていたから良い。
- ・優しく吹いていて音が良く感じれた。
- ・Aさんは、レミの移り変わりが素早くて、きれいに柔らかく音が吹けていた。
- ・Hさんは、初めのミと最後のミの伸ばすところがずーっと同じ強さで吹いていたところが良かった。
- ・高いミを弱く吹こうとしたら低い音が鳴ってしまうけど、Iさんは、息遣いが良くて、柔らかくも吹けているし、高いミの音が吹けていた。

この後、次時に向けて教師が児童の意見をまとめる中で、以下のようにリコーダー演奏の身体操作について気づきを促す説明を行った（以下のTは教師、Cは児童たちである）。

T：歌の時はどうやって歌っているでしょうか。歌の時には工夫して歌っていますよね。たくさん息を吸いますよね。吸うけれど、「はーっ」て全部だすわけじゃないですよね。おなかにためて出しますよね。

C：「少しずつ出してる」（筆者注：教師の話に合わせて試しに息を吸って吐き出している児童の姿が見られた。）

T：声を斜めにポーンと出すイメージで歌っているよね。身体揺らしながら歌ったりしていますよね。じゃあ、リコーダーは、どんな意識をして吹いているのかな？皆さんのリコーダーは？

C：かちかち～

T：今日みなさんが、音が柔らかくといっていたけど、身体の使い方を意識していったらいいんじゃないかな。次回はもっと身体の使い方を工夫して演奏していきましょう。

このまとめの後、最後に気づいたことを取り入れながら演奏する時間を取りたかったが、時間が無くなってしまい演奏は次時にまわすこととなった。

3) 2組でのグループでの交流活動④に見られた演奏方法の気づきと工夫

J児のグループでは、冒頭の二点ホ音（筆者注：サミングを使う高音域）の入りとそれに続くフレーズに注目して、試しに演奏しながら意見を交換する様子が見られた。J児は、特に冒頭の音の入りにこだわりを持ち、発音する直前に上半身を少しなめらかに上下させるような動作を行いながら、何回も演奏を繰り返して演奏しており、自分が思っているように柔らかく入ろうと試行錯誤する姿が見られた。これによって、他のメンバーもその動きに合わせて同時に演奏しようと試みていた。

また、このグループはその先のフレーズにも着目し

ており、4小節間のフレーズの形（筆者注：はじめ2小節は下行形で後の2小節は上行形）に合わせて、歌いながら手を動かしていた。さらに、K児が「最後はなめらかにしていきたいから」という言葉とともにフレーズをなぞりながら歌い、全員で曲の最後部分である下行形フレーズの少し弱くする方がよいか演奏して確認し合っていた。

4) グループで共有した工夫や良いところをクラスで発表する活動⑤

グループ活動の後、クラス全体で気づきを共有する言語活動を行った。以下は、その際の児童の発言である。

- ・Jさんが、初めのところで、頭を下げてから吹き始めると自然と入るようになっていました。
- ・波はさぶーんて来るけど、砂浜のところにある波はゆっくり来ますよね、それみたいな感じで下に行くんじゃないくて、同じになるようにふわーっと行くっていうのが、僕たちが考えたことです。
（筆者注：前に進むような感じを体と手の動きで表現）
- ・ふんわりとした音を表現するために、波みたいにやわらかくゆっくり吹いたらきれいになります。

ここで、教師が「波みたい」という言葉を取り上げて「波みたいな旋律ってどういうことかな？」という投げかけを行った。児童たちは、「ゆれながらリズムを取って・・・身体でリズムを取れたら波のように自然になる・・・」のような発言をしながら真剣に考えており、イメージはあるものの言葉にできない様子であった。そこで教師がさらにイメージを展開させる質問を児童に投げかけた。以下がそのやりとりである。

- T：はじめの音って高いでしょ？みんな今までどういうように演奏していた？
- C：（口々に）そのまま。落ちてった。バーンって吹いてた。ジェットコースター。
- T：じゃあ、今の入りはどういう風にすればいい？どこからがスタートのイメージかな？
- C：（口々に）ふんわり行く。吹く前から、波が始まる。

これらのやりとりの後、他の気づきや工夫の発表に戻った。L児は、冒頭の入りに続くフレーズの形に着目しており、「最初は（冒頭の入り部分）そうだけど、シラで下がってラシドレで一気に上がる山で・・・ミの音色が最後に残るから・・・良いと思う」といったように、フレーズの最後のミ（二点ホ音）に向かって演奏することを伝えたい様子であった。しかし「良いと思う」で終わってしまったため、他の児童は「良い」ということの意味がわからず、実際に思っていることがよく伝わらない状況になっていた。この活動の中で、

児童たちは、音やフレーズのイメージを言葉で表現することに試行錯誤している様子であり、これらの活動の中で口々と「言葉にすると難しい～～」といった発言が聞かれた。

これらの言語活動の後、教師が「波のように」「入る前から」といった振り返りの指導言を行い、再度上のパートを演奏させた。

3-5. 音楽的諸要素に関する児童の言語表現と音楽表現への還元

1組では、「ナチュラルに」「柔らかく」「強い」「弱い」「ふんわり」「優しい」という様子を表す言葉が専ら用いられていた。学習展開の特徴は、導入の①②の活動から授業の最後まで、出しにくい音を丁寧に出すということ、単音での音質についてこだわりを持っていたことである。特に「柔らかく」音を出すことを意識した学習が展開されており、特定の音のタンギングと息の強さを意識して身体操作していた様子が読み取れる。

2組では、「自然と」「さぶーんと」「波のように」「ふわーっと」「やわらかく」「ふんわり」という言葉を用いて、表現したい音の質を表していた。特に特徴的なことは、2組では音楽以外の自然の様子を比喻として用いて言葉で表そうとしたことである。この比喩的表現によって、音が伸びていることや、フレーズが繋がっていることから生み出される音楽の推進力を、波がゆったりと押してくる時のエネルギーと結び付けようとしたのである。

この後2組の児童は、前奏の部分から集中し、演奏する前に息をしっかり吸い込み、音に耳を澄ませながら少し身体が上下するような動きで冒頭の二点ホ音を丁寧に演奏していた。さらに、途中でのプレスも、フレーズが続くように意識しながら吸い込んでいる様子であり、この学習の最初に演奏した時よりも、リコーダーの楽器本体が共鳴して響いている音で表現できていた。また、1音1音切れた演奏ではなく、フレーズの方を感じながら意味を持った流れを作ることができていた。

4. 教師が見取った子供の音楽的成長

授業実践後、藤野教諭にインタビューを行った。藤野教諭は、音色に関するこれらの学習の中で、児童の音楽に対する意識の変化について以下のように述べている。

波のようになっていくっていうのが子供たちの発言に出ていました。単に音を柔らかく出す優しく出すということだけだと、その単発の音の意識だけですけど、それも意識しつつ、この曲は波のようになっていくから、それを意識したような演奏っていうのは、つまりフレーズの中での音色について、意識し

ているんだと思います。

1つ1つの音のコントロールだけでなく、フレーズという音の連なりがもつエネルギーの中でどのような音を出せばいいかという視点を児童が持つことができたことを、藤野教諭は感じている。

本稿で示した3時間目の授業の後、4時間目の授業の冒頭で《小さな約束》を演奏した際、最初の二点ホ音を伸ばした直後、児童から「ははは」「え～」という笑いが起こり、演奏を再度やり直した。この笑いに対して、藤野教諭は以下のように指摘している。

（筆者注：これまでは）ぐちゃぐちゃになったり、間違っただけの音が聴こえてきたりして、誰が間違っただけ？とか、みんな集中しよーやーとかいうような笑いは起きてても、この間のように最初吹いた時に「ちょっとみんな、なっていないやーん」みたいな子供たちの空気は今までに起きたことがなかったですね。

（中略）自分たちが意識してこういう音にしたいってさんざん思い描いたのに、それとは違う音がぼーんと出た時のその質、質を思いとして達成できたかできていないかの笑いが起きるっていうのは、高度な違いですね。子供たちの中で思い描く音とそういう風に演奏したいっていう音がはっきりあって、そうしようとして出来ていなかった時のずれに、「そのまま流しちゃいけんやろ」っていう意識になったっていうのは深まっていったんだなと感じました。

藤野教諭は、児童たちが、音の質の違いに耳を傾け、自分たちの思いが表現できていたかどうかを客観的に演奏時に聴き取っており、それらを表現する意識を大切にしたい姿を見取っている。ただ音を出すだけでなく、さらなる課題解決の欲求につながった様子が見れた瞬間だといえるだろう。

さらに、音色に着目した学習で見られた児童の成長について、藤野教諭は以下のように述べている。

単純にリコーダーの演奏の技能面も確かに上がったとともに、意識して出そうという意識の仕方が変わったってすごく思うんですね。結果として音の違いも出てきて良かったなというのもあるんですけど、それだけじゃなくてそういうふうに聴こうとする、耳を使おうとする態度に関しても成長が見られたんじゃないかなと思います。（中略）

音楽の学び方や聴き方にもつながっているな、と思います。こういったところを意識して演奏するんだ、こういったことを意識しながら工夫を考えるんだといったこと繋がっていると思います。

これらの言葉からは、児童たちの技能面だけでなく、音に対する意識が変わったと同時に、耳を使うという聴き方の成長の姿が見られたこと、つまり音楽を学習する際の学び方＝音楽表現における課題を見つける視点、そしてそれを追求する姿勢を学び取っていたということが読み取れる。

5. おわりに

音色のコントロールは、技能面と密接にかかわっている。技能の習得となると、機械的なトレーニングや、教師による一方的な教え込みになってしまうという問題が懸念される。しかし、児童たちが主体的に音楽の特徴を捉え、どう表現すればその音楽の良さを他者に伝えることができるのかを考えた後、教師から技能に関する助言を行うことは、児童のさらなる課題解決の意欲へとつながる点で有効である。教師が身体的気づきを促すような助言を行うタイミングを学習過程のどこに組み込むかによって、児童の学習の深まりが異なると考えられる。

児童が主体的に音楽の特徴を捉えるための手立てとして、比較聴取があげられる。自分の演奏を録音して授業の始めと終わりで比較したり、範奏と比較したり、自分で試すときに比較したりするといった比較聴取の活動は、新しい音楽的な気づきや学習課題を生み出す。耳で音楽を聴き取り、耳で判断する、ということを経験学習の中心に置くことが大切である。器楽学習の面白さの一つは、自分の声ではなく聴覚や視覚、息や指を使って楽器の操り方を自分の身体に覚えさせていき、瞬間的に楽器からいろんな音を生みだして、音楽に対する自分のイメージや思いを表現できるようになる、といったことにある。したがって、学習の中では、児童が自分の身体のような感覚と向き合いながら、自分のイメージを表現するためにはこの技法で良いのかというように、自ら振り返ることができるような指導を展開することが必要となる。このような学習を重ねることによって、音で思いを表現するには、自分の動作や感覚が関わっている、ということを経験しているのだから。

また、音楽学習において「なぜそうなっているのかな？ どうしたら表現できるかな？」という疑問を常にもって音楽に向き合うことは、自分自身をメタ認知したり、音楽を批判的に思考したりする能力の育成につながっていく。特に、音色に関しては、非常に多彩な言葉を用いずには思いや感じたことを他者に伝えることができない。したがって、〔共通事項〕の文言や「優しい」や「柔らかない」の形容詞等に加えて、自然や生活経験を結び付けて言葉で表現したり、身体表現したりして、それらに込められた思いや感情とともに、感覚を呼び覚ますという活動を行うことが求められる。

音色に着目した学習の音楽教育的な意味は、耳をよく澄ませて「聴く」能力の育成、言葉だけでは伝えら

れない音の微妙な質の違いを聴き取り、思いをもって丁寧に表現しようとする意欲や態度の育成、そしてそれらの表現に伴う身体的能力の育成、多様な事象や感情を内包している音楽を自ら読み解く能力を育成できることにある。楽器固有の音色、曲が求めている音色、自分が演奏したい音色を試行錯誤しながら、その瞬間で一番「良い音色」は何かといったように自ら課題をもって主体的に音楽学習することは、児童の思考力・判断力・表現力を育成し、深い学びを実現することにつながるといえるだろう。

付 記

福岡教育大学附属小倉小学校藤野剛教諭と、附属小

倉小学校5年生の児童に、授業実践協力の感謝を申し上げる。

なお、本研究は、科学研究費助成事業分担金基盤研究(C) 科研番号 16K04707 (研究代表者: 村上康子, 研究分担者: 山中和佳子他3名) の助成を受けたものである。

参考文献

文部科学省ホームページ (<http://www.mext.go.jp/>)
より (最終閲覧日: 2017 年 10 月 1 日)
「小学校学習指導要領」(平成 29 年 3 月)
「小学校学習指導要領解説 音楽編」(平成 29 年 6 月)